



草津

みなくさまつり

# 発展する南草津に生まれた新しい祭り 住民間の交流を生み、絆を深める

毎年11月、「みなくさまつり」が開催される日曜日、南草津駅周辺は大変な人出でにぎわう。南草津は近年、駅前にマンションが林立し、人口は急増しているが、その影で地域のつながりの希薄化が懸念されている。みなくさまつりは、住民間のコミュニケーションを深めてほしいという期待を込めて始められた新しい祭りだ。

## 乗降客数県内1位なもの 新旧住民のつながり薄く

南草津は中世の頃から、萩の名所「野路の玉川」で知られ、多くの歌人が和歌に詠んだ、歴史ある場所である。1980年頃までは、田畑が広がるのどかな地域だったが、94年にJR南草津駅が設置され、立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKIC）が開学すると、一気に宅地開発が拡大。駅前には大型マンションが次々と建設され、新たな住民が急速に増加した。そして、南草津駅とBKICが20周年を迎えた2014年度には、南草津駅は草津駅を抜いて1日の平均乗降客数が県内1位、土地公示価格でも駅前のマン

ション街区が住宅地としては県内最高となった。

その理由は、11年に新快速が停車するようになり、京阪神へのアクセスがさらに良くなったこと、大学があり、大企業の製造拠点多いことなどが考えられる。人口減少に悩む地域が多い中、南草津は全国的に見ても、目立って勢いのある街の一つといえる。

しかし、増え続ける新たな住民と以前から居住する住民のコミュニケーションが乏しく、新しい居住者は自治会への参加も少なく、街とのつながりが薄いとといった問題点も指摘されている。このような南草津の状況に対して、世代を超えて広く住民間のふれあいの機会をつく

食店で、多数の応募の中から抽選で選ばれた16店が出店。また、地域の和洋スイーツ店がこの日のために用意した自慢のスイーツを販売し、購入者の投票でグランプリを決める「スイーツグランプリ」も開催される。何軒もはしごして購入する客が続出する人気企画になっている。

草津青年会議所は、「わくわく広場」で、子供たちのために、クラフト教室やもづくり体験などを提供。毎年千人近い参加者を集めている。立命館大学は「立命館大学ブース」で、さまざまなサークル、団体が日頃の成果を展示。また、同大学の学生や一般応募による出演者が、演奏やパフォーマンスを披露する「みなくさまつり」の運営も担当。第2回出演の「川嶋あいさんなど、プロミュージシャンのスペシャルライブも毎回行われている。他にも、東北地方の産品を販売し、収益を

被災地の復興のために寄付している「震災復興支援市」を第1回から続けている。「地域の自治会が一つとなって行うイベントはこれまでなく、地域の住民に一体感が生まれた。さらに企業や大学との交流もよい刺激となっている」と田中香治運営本部長は、祭りの成果を語る。

## 祭りの原点は地域のふれあい 方向性を模索中

そもそも第1回は、11年3月12日に南草津駅に新快速が停車することを記念するイベントとして開催される予定だった。それが、前日に東日本大震災が起きたため、中止に。「半年後の秋にあらためて開催するにあたり、震災を通じて地域の絆の大切さを感じたことから、『えんどうつなぐ』をテーマとした。この趣旨に賛同いただけたのか、多くの来場者と反響をいただき、翌年以降も継続して開催されることになった」と竹川和貴事務局長は説明する。



11月22日に開催する、今年のポスターデザイン

来場者は毎年1万人を超え、大々的な告知はしていないのに、遠方から訪れる人も多い。動員力のある地域の祭りとして、まだまだ成長していける高いポテンシャルを

ろうと毎年開催されているイベントが「みなくさまつり」だ。

## 自治会、市、企業、大学が協力 ステージ、飲食、販売で大盛況

みなくさまつりは、地元の六つの町の自治会と草津市、草津商工会議所、（公社）草津青年会議所、立命館大学からな

る「みなくさまつり実行委員会」の主催で、毎年11月に南草津駅西口付近の特設会場で開催される。六つの自治会は「地域ブース」で模擬店を出店。草津市は地域で活動する企業や団体が展示を行う「企業ブース」を運営する。草津商工会議所が担当する「飲食ブース」には、草津周辺で営業する飲



クラフト教室やもづくり体験など、子供たちが楽しめる「わくわく広場」



立命館大学の学生や一般応募で演奏やパフォーマンスを披露する「みなくさまつりステージ」



家族連れを中心に、毎年大勢の人でにぎわう

秘めているように思われる。しかし、「大きくすることは考えていない」と話すのは田中運営本部長。「みなくさまつりの原点は地域のふれあい。集客だけを指すイベントにはしたくない。原点を忘れずにできる、イベントとしての適正サイズはどれぐらいか。それを考えていくためにも、この祭りによって、住民のコミュニケーションがどの程度深まったのか、地域とのつながりはよくなったのかなど、その効果を測ることも考えていきたい」と続けた。

## 次代につながる「コミュニティー」を 継続することの意義を求めて

第5回目の今年は11月22日に開催予定だ。「さらなる内容のステップアップを考え、準備を進めている。スタッフの人数

も100人以上となり、各団体の枠を超えて取り仕切るのも簡単ではなくなってきた。しかし、次の世代にも「南草津の良さ」を感じてもらえるためにも、交流の場としてみなくさまつりを続けていきたい」と田中運営本部長は思いを語る。「世代や立場を超えての交流は、時として大変なこともある。けれど、人と関わることのしんどさや、それゆえの面白さを次の世代の人々が学ぶ機会としてほしい」と竹川事務局長。住民間のつながりが、防災や防犯対策、地域の活性化にとって重要な要素であるのは間違いない。住民間のコミュニケーションを深めるための祭りという原点に立ち返りながら、地域のにぎわいづくりに取り組む、みなくさまつりの今後が注目される。